北アルプスの山々

岩波写真文庫　263

北アルプスの山々
263

岩波写真文庫 263 北アルプスの山々

編集 岩波書店編集部
写真 浅野孝一 五百沢智也 佐久間政義 中野峻陽 長谷川吉夫 広瀬藤司 福田耿之介 穂苅貞雄 三木慶介 横山元昭 岩波映画製作所

目次

立山，別山から大汝山への道

定価100円 1958年 5月25日 第1刷発行 1958年 7月 30日第3刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

本州のほぼ中央、新潟県糸魚川市にはじまり、長野県の中央部を縦断、さらに富士川ぞいに静岡市付近に抜ける大断層、フォッサ・マグナの西、富山、長野、岐阜三県の境界にまたがる三千米級の山岳地帯がある。昔、飛騨山地と呼ばれた山々だ。海抜三千百九十米の奥穂高岳を最高峰とし、北は黒部川の深い谷を挟んで東側に後立山連峰、西側に劔・立山連峰が南北に並走し、この両山系が合流する三俣蓮華岳から南へ、槍・穂高連峰へと続き、常念連峰を派出し、さらに焼岳・乗鞍岳を含める南北凡そ百粁に及ぶこの山地は、今から三、四千万年前、フォッサ・マグナを生んだ大地殼変動と、それに伴う大小の隆起、陥没によって生れたものといわれている。常念連峰、槍・穂高連峰、後立山連峰、劔・立山連峰などの東側の急峻な斜面は、いずれも断層によって生じたものであろう。また地層の褶曲運動や立山、鷲羽岳、焼岳、乗鞍岳など諸火山の活動もこの山地を形成するのにある程度の役割を果したのであろう。この山地の峰々に節理の粗い火成岩の花崗岩からなるものが多いことは火山活動の影響を物語るものであるが、常念連峰と白馬岳の一部は水成岩の秩父古生層であり、槍・穂高連峰は節理の細かい、玢岩と流紋岩の山である。

この本州の屋根ともいうべき高峻な山々に対して、「日本アルプス」の名を与えたのは明治十一年、鉱脈をさがして槍ヶ岳など、十余の峰に登ったイギリスの鉱山技師、ウィリアム・ガウランドであった。その後、イギリスの宣教師、ウォルター・ウェストンが明治二十五年以降、四度にわたって上高地を訪れ、槍、穂高、その他の高峰に登攀、そのときの紀行を「日本アルプスに於ける登山と踏査」と題して明治二十九年ロンドンで出版した。当時、アルプスといえばかつての飛騨山地を指したものであったが、やがて日本でも近代登山が盛んになるにつれて、当初のアルプスは北アルプスに、従来の木曽山脈は中央アルプス、赤石山脈は南アルプスと区分されるようになった。今では北は白馬岳、南は乗鞍岳にいたる間の山々、ほぼ中部山岳国立公園に指定されている地域が北アルプスと呼ばれている。現在、北、中、南アルプスのうち、最も登山者が多いのはこの北アルプスであり、夏山のシーズンになれば東京から登山者用の臨時列車が運転され、燕岳から大天井岳、槍ヶ岳へと続く縦走路には、「アルプス銀座」の名がつくほどに登山者が集中する。

富山市・神通川河畔からみた立山連峰

富山から立山へ

富山平野から南東を望むと平野の向うに北アルプスの北端が屏風のようにそびえている。劔・立山連峰の山々である。これらの山々のうち、大日連峰を前衛とした雄山、大汝山、浄土山のいわゆる立山三山は数百年前から加賀の白山、駿河の富士山と並んで信仰登山が栄え、「立山講」の本山として人々に親しまれていた。山麓のある地方では二十歳の男子で一度も立山に登ったことのない者は一人前の男として扱わない風習さえあったほどである。北アルプスの山々の中では一番はやく開けた山であろう。昔は山麓から頂上までの距離が長く、かなり困難であった立山登山も、山麓の千寿ガ原まで電車が通じ、そこから弥陀ガ原の下端、美女平へケーブル・カーが架設され、さらにそこから登山バスが運行されている現在では、富山駅から一日の中に往復できるほどになった。

かつて立山登山の根拠地であった芦峅寺

千寿ガ原から美女平までのケーブル. 下に常願寺川がみえる

簡単に登れるので軽装のものが多い

登山バスは標高1000～2000米の高原を行く

室堂へ通じるバス道を行く登山者

白山火山系の旧立山火山は鳶山，ザラ峠，竜王岳，浄土山，国見山，天狗山でかこまれた湯川の上流地帯を噴火口として活動したが，その際に流出した溶岩によって広大な弥陀ヶ原が形成された．美女平から室堂平へと高原を登るにつれて濶葉樹の原始林から針葉樹林帯に，さらに灌木帯，そして草木帯．高山植物帯へと植物の分布が規則正しく変って行く．

弥陀ヶ原は 7，8 月頃，一面に高山植物が咲き乱れる

弥陀ヶ原．立山は天候の変化のはげしいので知られる

登山者の中には白衣の立山講の人も混る

わが国では最大の溶岩台地，弥陀ヶ原は，北を称名川，南を常願寺川によって挾まれ，標高1400米の美女平から2000米の室堂平にわたる長さ約15粁，幅約3粁の広大な地域である．登山バスが運転されるようになってからは，春から秋にかけて富山市からハイキングに来る人たちが多い．

白山火山脈の活動を示す地獄谷の噴煙

室堂付近

追分小屋で左旧道、右新道と二分した登山道は天狗平で合流した後、さらに左は地獄谷、右は室堂へと分岐している。室堂平の中心にはおよそ二百年前、加賀の前田藩主によって建設されて以来、立山登山の根拠地、また参籠所として利用されてきた室堂がある。付近には夏期臨時郵便局、営林署、旧測候所等の建物が立ち並び、夏期シーズン中には立山登山の中心となるところだ。室堂から立山登山の本道と分れて道を北にとると、旧立山火山の側火山であったミドリガ池、ミクリガ池の爆裂火口跡を経て地獄谷へはほぼ一粁。地獄谷ではいまなお多数の硫気孔が亜硫酸ガスや硫化水素の噴煙を上げている。弥陀ガ原もこの室堂平と地獄谷の周辺まで登るとその上端に近く、残雪も多くなり、雪田のそばには高山植物のお花畑が散在し、立山三山もすぐ目前に見上げられる。

室堂付近からみた立山．右から雄山，大汝山がみえる

地獄谷．噴煙の向うに温泉小屋がある

天狗平小屋．室堂平と地獄谷との分岐点にある

室堂付近には石地蔵が多い

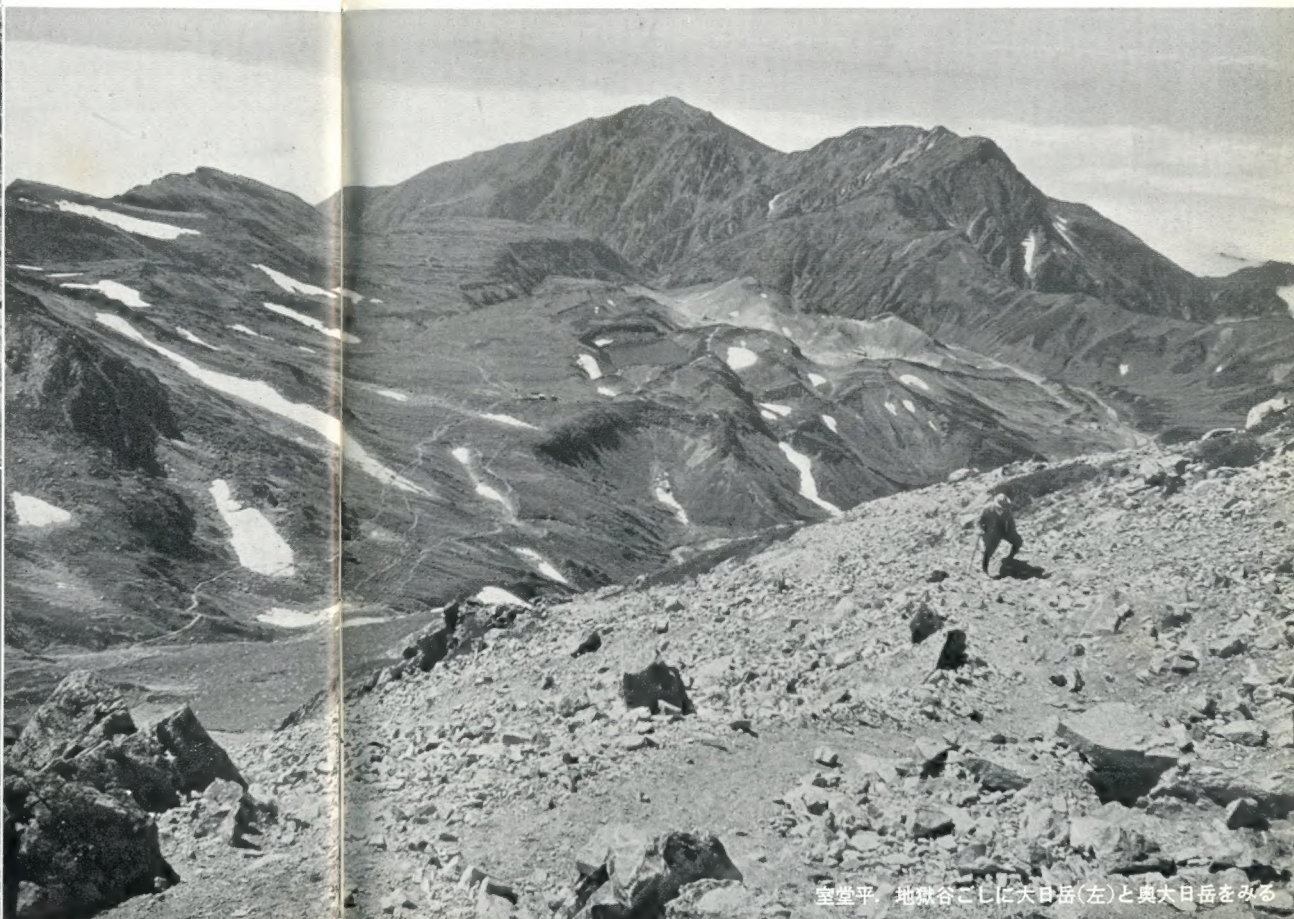
頂上周辺

室堂から雪渓を横切って立山主稜の鞍部、一ノ越まではほぼ一時間半。かなりきつい登り道である。ここまで登れば東への視界がひらけ、後立山の峰々はもちろん、はるか下方には黒部川の谷も見られる。ここから道を南にとれば富山大学立山研究所、阿弥陀堂のある浄土山まで三十分余。浄土山の西南側のけずりとったような崩壊は、旧立山火山の火口壁である。一ノ越から北に稜線をたどれば二ノ越、三ノ越、四ノ越、五ノ越と過ぎて雄山頂上へは一時間弱。古来、立山信仰の中心であるこの雄山の頂には天之手力雄命と伊弉諾尊を祀る雄山神社の峰の本社があり、夏のシーズン中は山麓の雄山神社から派遣され、五ノ越の社務所に寝泊りする神官の白い姿もみられる。雄山から稜線をさらに北へ、劔岳へと続く道を進むと、約半時間で立山の最高峰、大汝山に達する。

一ノ越の小屋

一ノ越の小屋の前，遠望は槍・穂高連峰

雄山への登り道から一ノ越を見下す

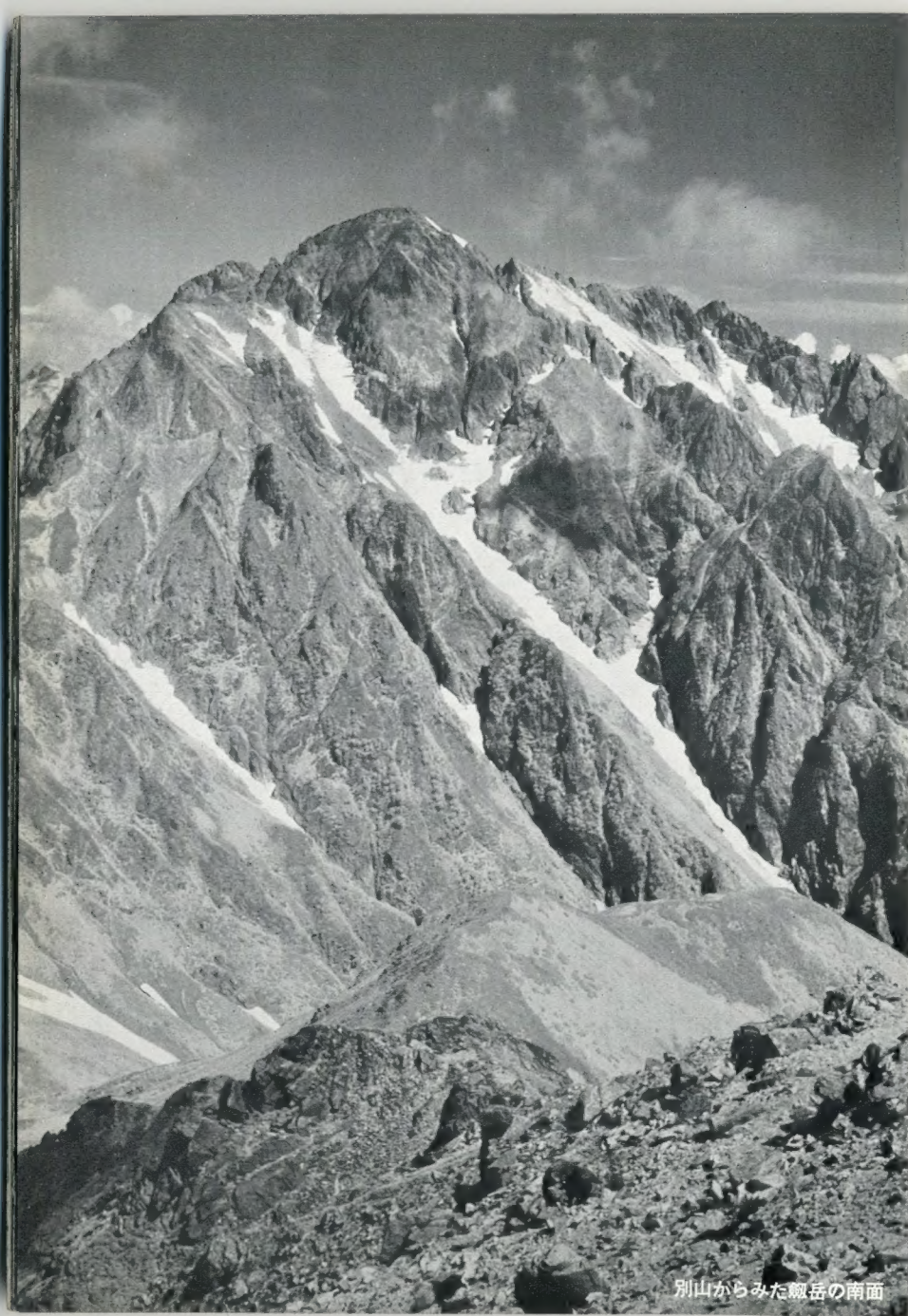
雄山頂上には雄山神社の峰の本社がある

室堂平，地獄谷ごしに大日岳(左)と奥大日岳をみる

南東，富士山と南アルプス方面をみる

雄山頂上からの展望はすばらしい．北には剱岳が近々とそびえ，東は深い黒部川の谷をへだてて白馬・後立山の山々，さらにその稜線ごしに頸城連峰や上信，浅間の山々が望まれる．東南には遠く富士と南アルプスの山々が浮かび，南には三俣蓮華岳から槍・穂高連峰，南西には弥陀ヶ原，大日連峰を間にして，遥かに石川・福井県境の白山が見える．

雄山頂上から南西，加賀の白山方面をみる

黒部川の谷をへだてて後立山連峰，その向うに浅間山をみる

南，槍・穂高岳方面をみる

立山の北方にそびえる劔岳は東側を黒部川、北西側を常願寺川の支流、白萩川と立山川によって鋭く削られている。南から北へ、劔ガ御前、前劔、劔本峰、三ノ窓頭、小窓頭、大窓頭、白兀山、赤谷山の峰々が続き、劔八峰をはじめ垂直に通る節理をもつ花崗片麻岩からなる、切立った岩峰にその特色がある。

別山乗越にある劔御前小屋

仙人池からみた劔八峰

別山からみた劔岳の南面

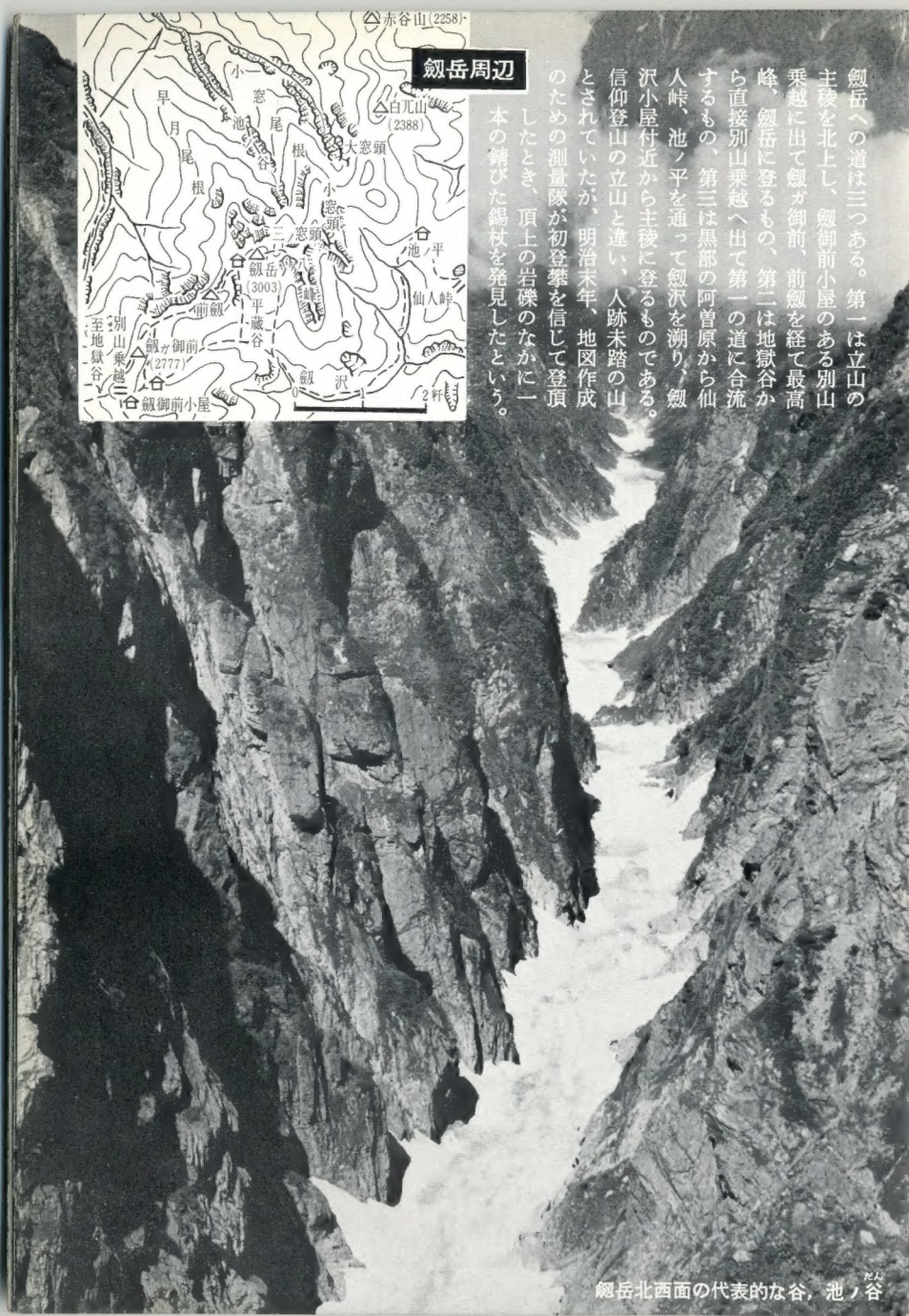
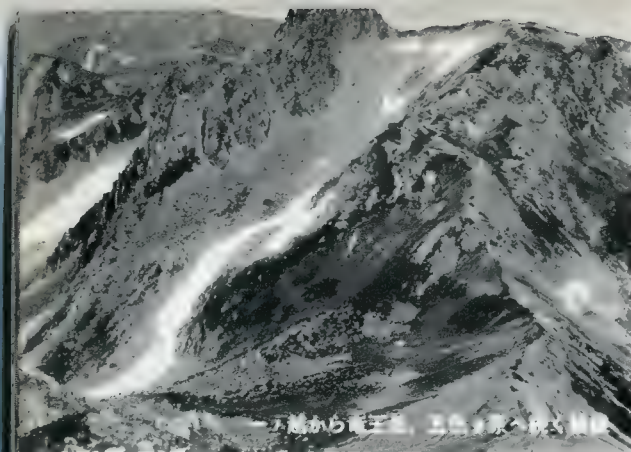
剱岳周辺

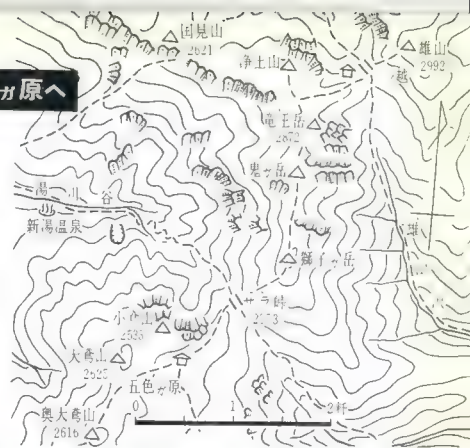
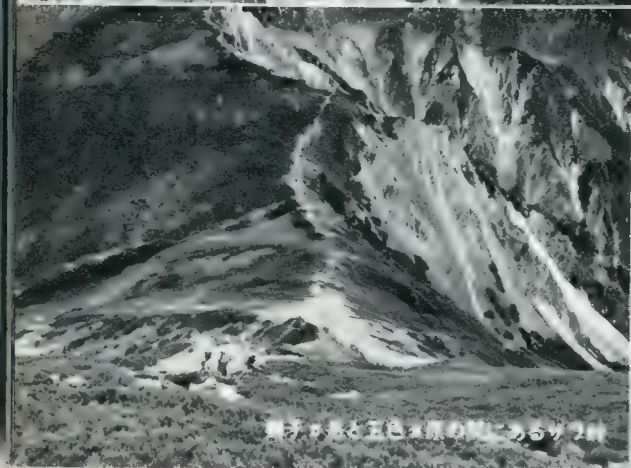
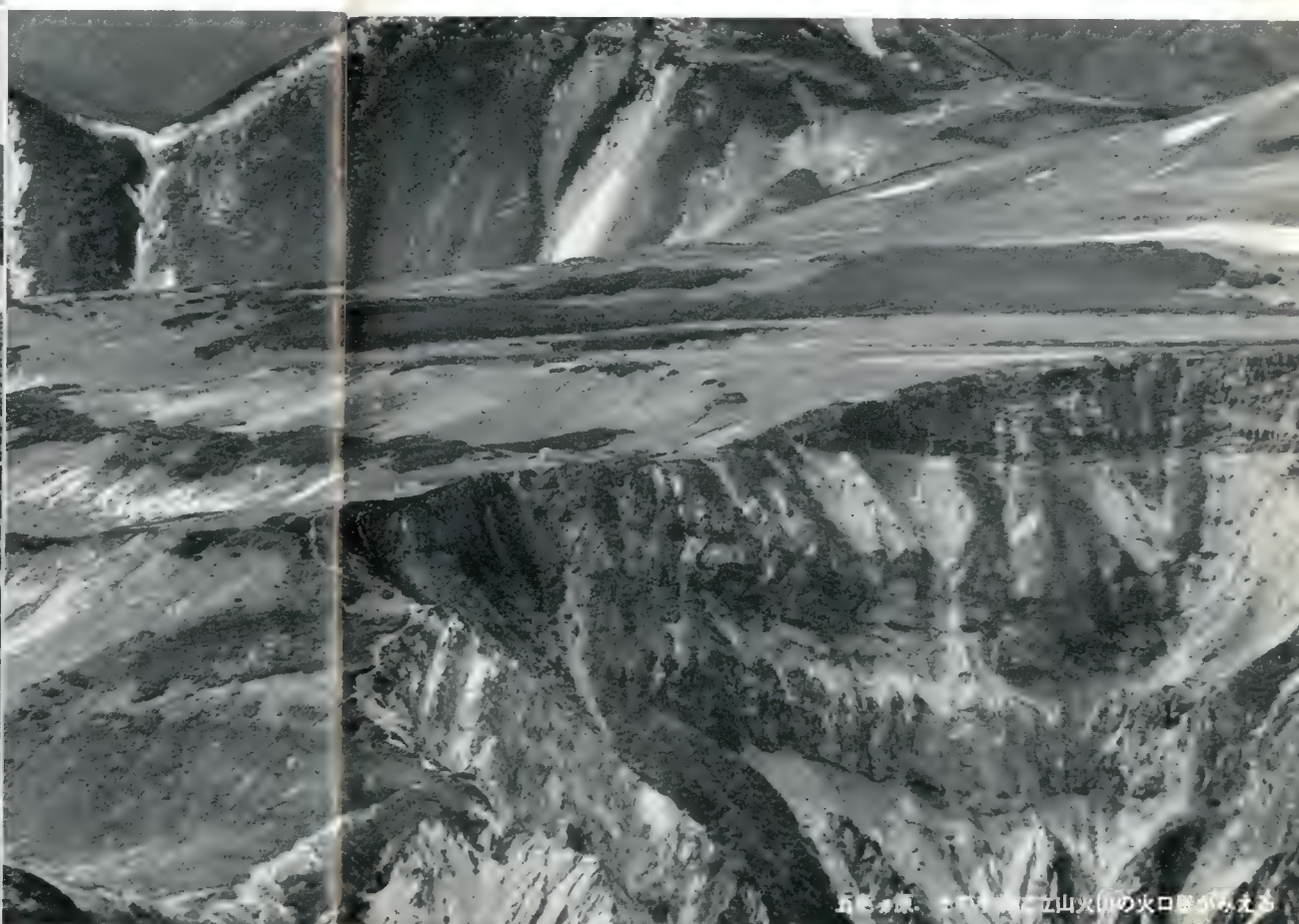
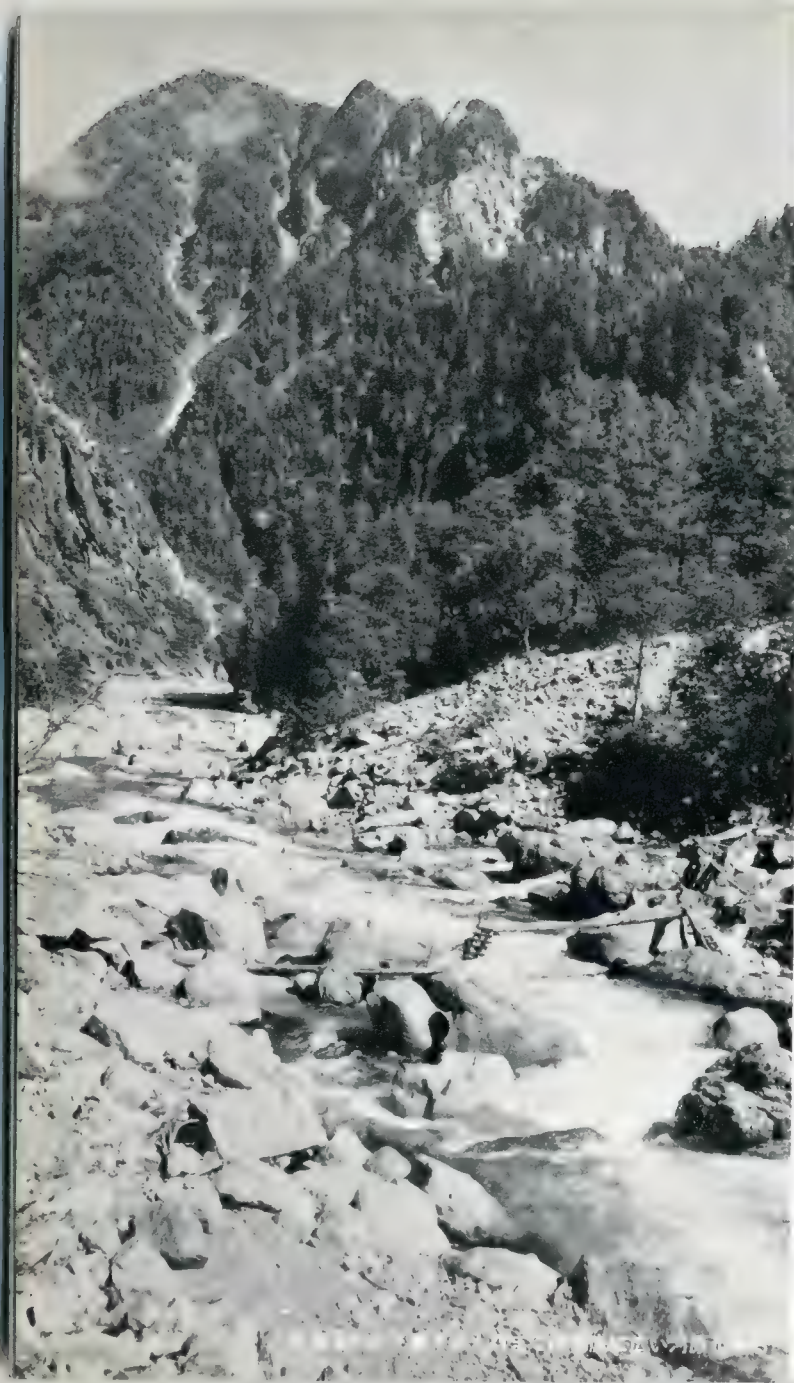
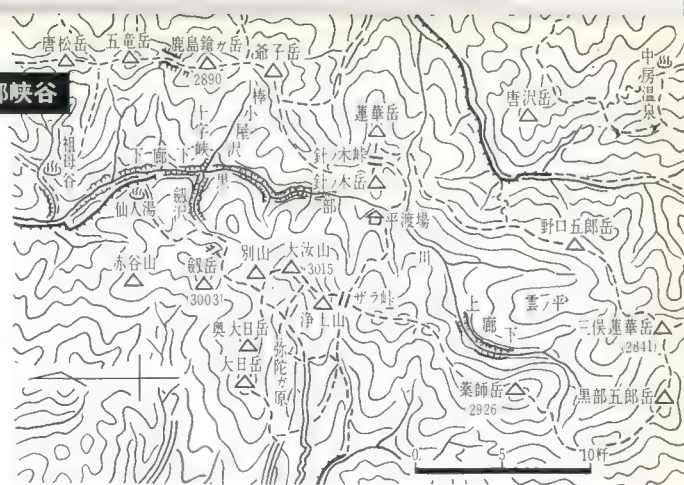
剱岳への道は三つある。第一は立山の主稜を北上し、剱御前小屋のある別山乗越に出て剱ガ御前、前剱を経て最高峰、剱岳に登るもの、第二は地獄谷から直接別山乗越へ出て第一の道に合流するもの、第三は黒部の阿曽原から仙人峠、池ノ平を通って剱沢を溯り、剱沢小屋付近から主稜に登るものである。信仰登山の立山と違い、人跡未踏の山とされていたが、明治末年、地図作成のための測量隊が初登攀を信じて登頂したとき、頂上の岩礫のなかに一本の錆びた錫杖を発見したという。

剱岳北西面の代表的な谷，池ノ谷

剱ガ御前からみた剱岳と平蔵谷

一ノ越から竜王岳，五色ヶ原へ続く稜線

五色ヶ原へ

湯川源流の噴火口から流出した溶岩によって西北方に日本最大の弥陀ヶ原高原をつくった旧立山火山は東南方には五色ヶ原高原を現出した。天狗山、国見山、浄土山、竜王岳、鬼ヶ岳、大鳶山、奥大鳶山などの湯川の谷を囲むすさまじい火口壁が往時の噴火のはげしさを偲ばせている。大鳶山、奥大鳶山の東にひろがる五色ヶ原へは一ノ越から稜線伝いに南下してザラ峠を越えて約三時間半の行程だが、また湯川を溯り、旧火口壁の急坂を登ってザラ峠に達する道もある。標高約二千五百米、広々と展開する五色ヶ原は高山植物が豊富な静寂境だ。ザラ峠は天正十六年の初冬、富山の藩主であった佐々成政が豊臣秀吉方の隣国、前田利家と争い、遠州の徳川家康に援けを求めて少数の家臣とこの峠から平に下り、さらに針ノ木峠を越えて松本平に出たという史実の伝えられる古い峠である。

黒部峡谷

北アルプスの最奥部、三俣蓮華岳と鷲羽岳に源を発する黒部川は、その東側を後立山連峰に、西側を劔・立山連峰の二大山系に限られ、およそ百三十粁を北流、日本海に注いでいる。この黒部川の谷は断層によって生じた深い谷が、さらに水蝕作用によって削り下げられたもので、典型的なV字型の峡谷をつくっている。五色ヶ原の東麓にある平渡場はザラ峠と針ノ木峠をむすぶ道と黒部川との交叉するところ。このあたりは比較的谷もひらけ、河原も見られるが、ここから上流は歩く道も殆どない上廊下と呼ばれる峡谷、下流は黒部川の谷と、支流、劔沢、棒小屋沢の谷が出合う十字峡を経て仙人谷ダムまでおよそ十粁、下廊下と呼ばれる深い谷が続いている。この谷も仙人谷ダムまで下れば関西電力の専用軌道が宇奈月温泉へ通じており、阿曽原からは劔岳への登山路が西南に、欅平からは唐松岳、白馬岳への道が東に分かれている。

随所に嶮しい岩壁をもつ黒部峡谷は長いあいだ未開の地として放置され、一部の探検登山家によって踏査されていたにすぎなかったが、昭和に入って黒部川を利用する水力電気の開発が本格的になると、宇奈月から仙人谷ダムまでは電力会社の専用軌道が敷設され、下廊下には上流の電力源開発や水量調査のために歩道の開設がすすめられた。垂直の削壁の横腹、高さ数十米の場所に二本の丸太棒を太い針金やワイヤーロープで吊った桟道や岩壁を削りとった細道が続き、人々は岩かどや、ワイヤーにつかまり、狭い梯子を上り下りして往来する。平渡場から上流、上廊下にも近年、一部ではあるが電源調査のために歩道がつくられた。

岩と針金をつたって歩く

白馬連峰

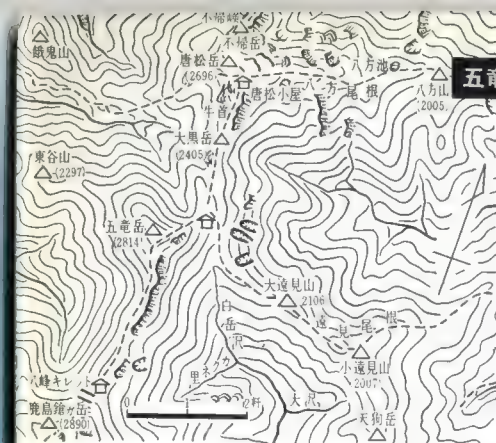
黒部川の谷を挟んで劔・立山連峰と相対する後立山連峰の北端に白馬岳がある。むかし、信濃側では西にそびえる山として西山、越中・越後側では大蓮華山と呼んでいた山である。白馬の名はその豊かな残雪が白い馬を連想させたからとも、毎年五月下旬頃、この山の東斜面に馬が駈けているような雪どけの形が現われ、それがその頃、田のしろかきをはじめる山麓の部落の人々の目安となったからであるともいう。この白馬岳から南へ、杓子岳、鑓ガ岳と続く峰は白馬三山とも云われるが、この山地の東側、長野県の安曇野(あずみの)に面する斜面は急峻で、谷筋が深くきれこんでいる。山頂からの眺望はひろく、南ははるか三俣蓮華岳へ続く尾根、西には劔・立山の連峰が望まれる。また北はさえぎる高山もなく、能登半島から富山、新潟の海岸線、さらに日本海をへだてて佐渡ガ島まで望見できる。

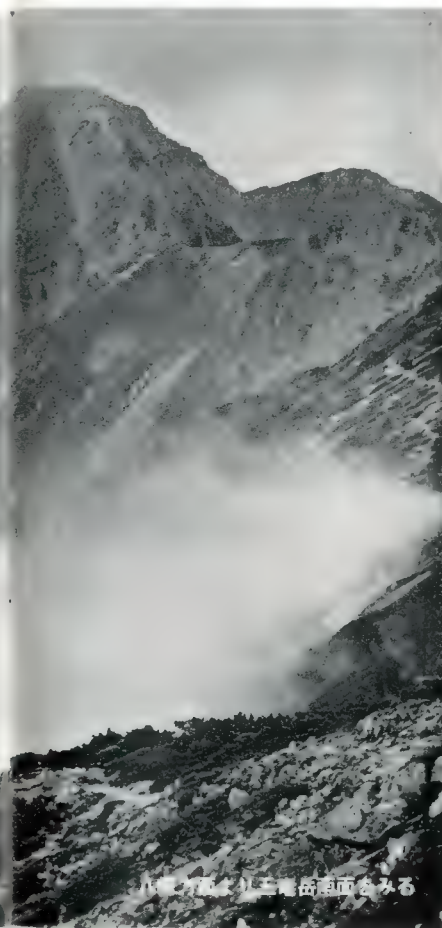
白馬岳の西，清水岳から黒部川をへだてて劔・立山連峰をみる

八方[illegible]から[illegible]白馬三山　[illegible]から[illegible]白馬岳

[illegible]は切りたった絶壁に[illegible]

北アルプスの北端に位し、冬の西北の季節風をまともに受けるため、白馬岳は雪の深い北アルプスの山々のうちでも最も雪が多く、東面の谷には夏でも大小の雪渓がかかっている。なかでも白馬岳本峰と杓子岳の間、松川上流の北股入の大雪渓は有名だ。大糸線信濃四谷駅から登山バスを利用すれば、終点、中山平から大雪渓を登って白馬岳頂上まで約五時間。簡単に登れるためかとくに婦人の登山者が多い。杓子岳、白馬岳の鞍部から山頂にかけてのお花畑は、高山植物の種類の豊かなことで知られている。

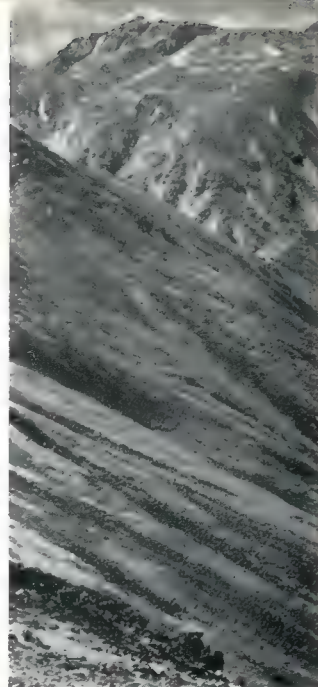
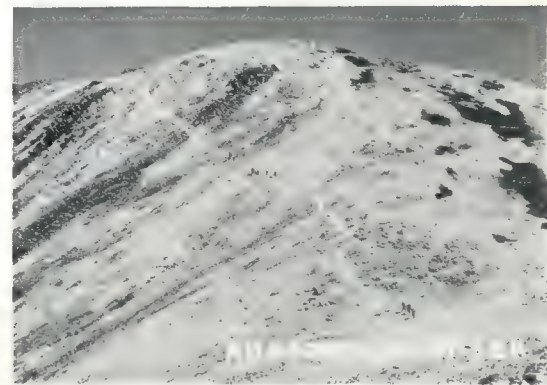
白馬岳頂上から南に杓子岳をみる

鑓ガ岳から天狗尾根をすぎ、不帰岳、唐松岳、五竜岳を経て鹿島鎗ガ岳へ続く稜線は、東側も西側も急峻な断崖が多く、やせ尾根の上を一本の縦走路が走っている。白馬連峰から南下、天狗の下りを下り、不帰嶮にかかるあたりは東西両側とも絶壁が切れおち、要所には岩に足場を切り、針金をはってあるほどの難所だ。縦走路は唐松岳の南の鞍部で細野から八方尾根を登り、祖母谷温泉を経て黒部川へ下る道と交叉し、五竜岳の北では遠見尾根をすぎ、神域へ下る道を派出する。これら支道の道筋にあたる八方尾根、遠見尾根はそれぞれ白馬連峰と後立山連峰の絶好の展望台だ。五竜岳を越えて主稜をさらに南下すれば鹿島鎗ガ岳の北に、稜線がすっぽりと切れ落ちた八峰キレットがある。後立山連峰の尾根では最大の難所といわれるこのキレットは、梯子や鎖がかけられたいまの道ができるまで、黒部川側の斜面を数百米も下り、再び鹿島鎗ガ岳へ登る以外には道がなく、ここを越えるだけに五、六時間もかかったところである。

鹿島鎗ガ岳周辺

鹿島鎗ガ岳は双耳峰をもつ美しい山である。この山から南西へ爺ガ岳、岩小屋沢岳、鳴沢岳、赤沢岳、スバリ岳、針ノ木岳と続く稜線からは、黒部川の谷をへだてて西北に劔岳、立山が眺められる。針ノ木岳の東、蓮華岳との間にある針ノ木峠から西に下れば平渡場に、籠川沿いに東に下れば大町市に出るが、この道は古来から信濃と越中を結ぶ要路であった。鹿島鎗ガ岳の東麓、鹿島は平家の落武者部落ともいわれ、鹿島川の上流、カクネ里の名も隠れ里の転訛したものという。

針ノ木雪渓からみた赤沢岳

蓮華岳から西北，後立山連峰の尾根ごしに劒岳(右)，立山をみる

烏帽子岳から三俣蓮華岳への山稜には，北から南へ，三ッ岳，野口五郎岳，真砂岳，赤岳，ワリモ岳，鷲羽岳などいずれも3000米に近い高峰が連なる．東側は深く落ちこむ高瀬川の渓谷をへだてて，餓鬼岳，燕岳．大天井岳の連嶺に相対し，西側はやや緩傾斜で，黒部川の源流地帯．雲ノ平に続いている．

野口五郎岳から南に続く縦走路 [illegible]，左に笠ヶ岳がみえる

東沢乗越付近からみた真砂岳．左の尾根は野口五郎岳に続く

烏帽子岳から三ッ岳，野口五郎岳へと続く尾根道は北アルプスには珍らしく山容もおだやかである．南，東への視界もひろい．大町市から高瀬川沿いに濁小屋を経て，ブナ立尾根の急坂を登り，烏帽子岳の南から野口五郎岳，三俣蓮華岳をすぎ，槍ヶ岳に至る縦走路はかなり利用者の多いコースである．

三俣蓮華岳周辺

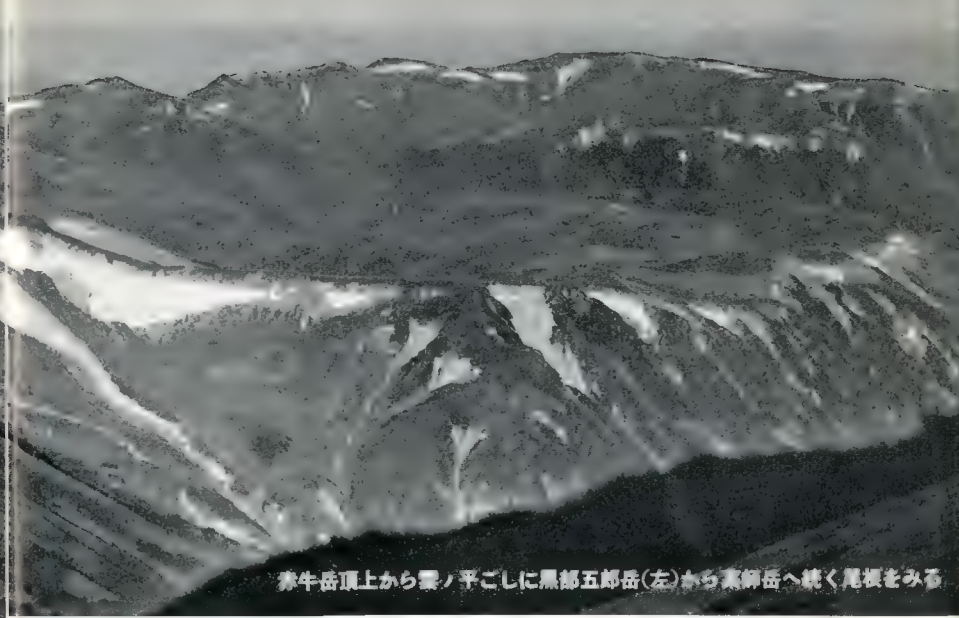
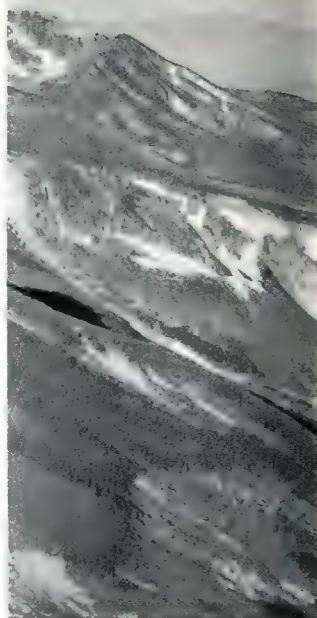
劒・立山連峰から薬師岳を経て南東に迂回する尾根、後立山連峰から烏帽子岳を経て南西に延びる尾根、槍ガ岳から双六岳を経て北上する尾根、この三主脈が合するところに三俣蓮華岳が位置している。かつては越中、飛驒、信濃三国の、いまは富山、岐阜、長野三県の県境だ。三つの尾根を縦走する登山道もここに集まっている。この山の北にひろがる雲ノ平を含めた一帯は北アルプスの山々の中では最奥部に位し、三俣蓮華岳の東北、鷲羽岳との鞍部に立つ三俣蓮華小屋までは山麓からどのコースを登っても二日はかかる。鷲羽岳は立山火山と同じ頃に活動した火山で、鷲羽池はその旧噴火口。そこから見る槍ガ岳方面の眺めはすばらしい。双六岳と樅沢岳の間の緩斜面、双六平には双六池があり、高山植物も多い。ここは西鎌尾根への縦走路と笠ガ岳への道の分岐点である。

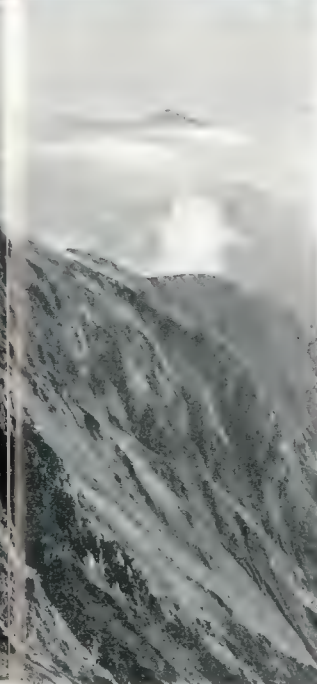
鷲羽池と背後は槍ガ岳と北鎌尾根

樅沢岳からみた双六岳と双六小屋

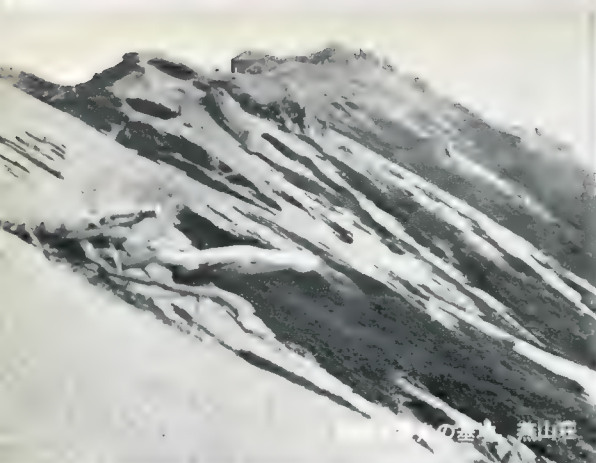
雲ノ平からみた三俣蓮華岳 遠くに笠ガ岳がみえる

一面ハイマツの雲ノ平　背後は黒部五郎岳

雲ノ平は一名，奥ノ平とも呼ばれ，鷲羽岳の火山活動によって生れた溶岩台地と推定されている．東，南，西の三方を北アルプスの高峰にかこまれたこの高原は灌木でおおわれ，晴れた日には周囲の山の眺めが美しい．雲ノ平の名は，地形の関係から雲や霧のかかることが多いためとも，また，黒部五郎岳からみると，残雪期に蜘蛛の形が現われるからともいう

赤牛岳頂上から雲ノ平ごしに黒部五郎岳(左)から薬師岳へ続く尾根をみる

薬師岳東面　上半は大きくカールになっている

太郎兵衛平の小屋

三俣蓮華岳から北へ，西に大きく弧を画きながら北上する山稜は，南から黒部五郎岳，北ノ俣岳，太郎山，薬師岳，越中沢山と続いて五色ヵ原へ連なっている．この山稜には大きく根をはった山が多く，尾根筋にも太郎兵衛平のような緩斜面がみられる．薬師岳の東面にある，氷河遺跡ともいわれる金作谷，中央，南稜の3つのカールはむしろ珍らしい風景である．

常念連峰

三俣蓮華岳から槍ヶ岳、穂高岳へと続く北アルプスの主稜とほぼ平行して、その東、高瀬川、梓川の谷をへだてて、燕岳から南方へ、大天井岳、東天井岳、横通岳、常念岳、蝶ヶ岳、大滝山と連なる山々がある。松本平から眺めると、平野の西端にそびえてみえる常念連峰である。北端の燕岳は花崗岩質で、頂上には大きな岩塊がつみ重なり、その風化した白い岩礫とともに、この山特有の山容をつくっている。山麓の中房温泉から山頂まで四時間余、白馬岳とともに北アルプスでは登山者の多い山だ。大天井岳から南、蝶ヶ岳までの山々は槍・穂高連峰の展望台といわれるだけに、西方の眺めはすばらしい。燕岳から南に進み、大天井岳から西南へ、喜作新道を通って東鎌尾根から槍ヶ岳に至る道は、アルプスの銀座コースといわれ、夏山最盛期には登山者の列ができるほどの賑いをみせる。

燕山荘

その左に大天井岳がみえる

常念岳の北，常念小屋から槍・穂高の連峰をみる

常念小屋付近からの遠望、右から槍ヶ岳、大喰岳、中岳、南岳

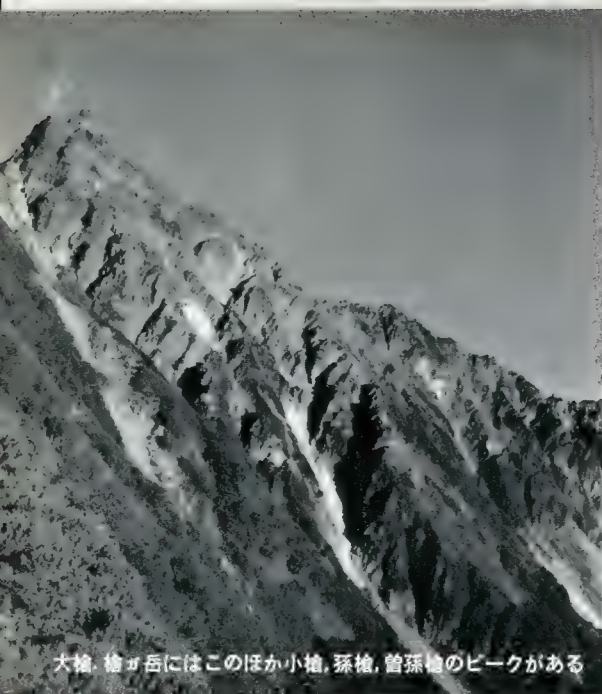
大天井岳で槍ヶ岳への表銀座コースを西南に分け、さらに東南方に延びる常念連峰は、西側では梓川の深い渓谷をへだてて槍・穂高連峰と相対し、東側は松本平をあいだにして、はるかに美ヶ原高原と対峙している。尾根を南にすすむにしたがって、相対する槍・穂高連峰の眺めは移り変って行くが、常念岳以北では北から南へ、槍ヶ岳、大喰（おおばみ）岳、中岳、南岳、そして北穂高岳の北で大きく落ちこむ大キレットへと続く山稜が眼前に迫る。

常念岳山頂の展望は四囲さえぎるものもないが、これより南、蝶ヶ岳、大滝山にかけての尾根からは槍の諸峰よりも穂高の岩峰群の眺めがすばらしい。大キレットで大きく標高を下げた稜線は北穂高岳でふたたび頭を擡げ、唐沢岳、奥穂高岳、前穂高岳が涸沢カールをかかえこみ、前穂高岳からは北尾根がぐっと前方にせり出している。山稜はなお西穂高岳、焼岳と連なり、その南にははるかに大きく根をはった乗鞍岳、御岳も望まれる。

穂高連峰、右から北[illegible]、左端に乗鞍岳がみえる

[illegible]岳小屋付近からは[illegible]に槍ヶ岳がみえる

燕岳から大天井岳を経て槍ヶ岳へ出るには、かつては大天井岳から東天井岳へ迂回し、一旦、梓川の上流、二ノ俣谷へ下った後、再び西岳小屋の辺りで尾根へ出ていた。大天井岳から直接、赤岩岳を経て西岳小屋に出る現在の尾根道は大正の終り頃、アルプスの名猟師といわれた小林喜作の開いたもので、その結果、所要時間は半分以下となった。旧道は殆ど通る人もなく、いまでは廃道に近い。喜作新道と呼ばれるこの尾根道を西に辿り、水俣乗越から東鎌尾根を登りつめると槍ヶ岳である。

東鎌尾根から穂高方面をみる

[illegible]尾根か[illegible]

槍ヶ岳

槍ヶ岳は東西南北に鋭い岩稜を派出している。東は東鎌尾根といわれ大天井岳から燕岳への表銀座コースに連なるもの。南は大喰岳、中岳、南岳を経て穂高連峰への山稜。西は西鎌尾根と呼ばれて、双六岳から三俣蓮華岳へ続き、北は北鎌尾根と呼ばれて高瀬川の上流、天上沢と千丈沢のあいだに落ちこんでいる。鋭くとがった山頂は孤立した岩峰で、槍の穂と名づけられ、その北西には曽孫槍、孫槍、小槍などの小岩峰が連なっている。南岳の東麓、天狗平には氷河が流下した際にできたと思われる丸味のある根石が多い。この槍ヶ岳の初登頂は文政十一年七月二十八日、越中生れの念仏僧、播隆上人によって槍沢からなされたという。上高地から梓川の上流、槍沢に沿って登ればまだ山小屋のなかった時代、槍ヶ岳登攀の根拠地として利用された赤沢岩小屋や坊主岩小屋がみられる。

大槍. 槍ヶ岳にはこのほか小槍, 孫槍, 曽孫槍のピークがある

[illegible]

[illegible] このあたりは氷河公園といわれる氷河の[illegible]

穂高岳（連峰ともいう）は東は梓川の谷を隔てて常念連峰と相対し、涸沢のカールを囲んでほぼ円形に並ぶ北穂高岳、唐沢岳、奥穂高岳、前穂高岳、さらに奥穂高の西南にそびえる西穂高岳からなっている。最高峰、奥穂高岳は海抜三千百九十米。北アルプス第一の高峰で、日本では富士山、南アルプスの北

穂高連峰

岳に次ぐ。急峻な山容はこの連峰を形成する岩石が角閃玢岩で、緻密で硬いが、節理が細かく、崩壊しやすいためであるという。北アルプスの山の中でも一番地形が複雑であり、さまざまの岩壁や急峻な雪渓が多く、岩壁と雪渓の登攀を中心とする近代登山にとっての絶好の練習場となっている。主稜の東側、涸沢のカールにのぞむ斜面の岩壁もすさまじいが、奥穂高岳から西へ、ジャンダルムを経て西穂高岳へ続く尾根の飛騨側の斜面はそれ以上で、飛ぶ鳥さえ越せぬといわれていた。

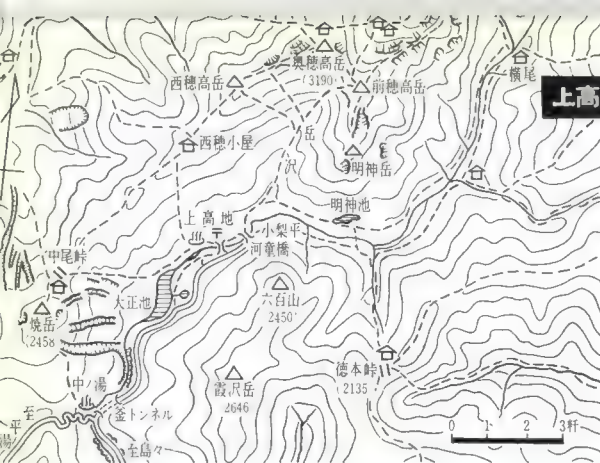
北穂沢からみた前穂高岳と涸沢

ジャンダルム．奥穂高岳から西穂高岳へ通ずる尾根にある

奥穂高岳東面．涸沢が擂鉢のように落ちこんでいる

三方を三千米級の穂高の峰々に囲まれた涸沢は、北アルプス最大のカールである。周囲の山から見下せば平地とも見えるほどのこの馬蹄形の緩斜面には、幾つもの雪渓が集中し、夏でもスキーができるほど雪が豊富だ。オリンピック派遣選手のスキー合宿が行われたこともある。屏風岩はこのカールの東端を扼する垂直の岩壁。屏風岩を迂回して横尾谷沿いに下ればやがて梓川の本流に出る。常念連峰の西斜面、槍・穂高連峰の東斜面の水を集めて南流するこの川はこのあたりではかなり水流が豊かである。

涸沢からみた唐沢岳

横尾谷からみた屏風岩（左）と南岳

穂高連峰の南、梓川の流れに沿って山間には珍らしい平地がある。これが上高地で、南端の大正池から北端、横尾まで約十二粁。その平坦な地域は、地質時代、西へ流れて飛騨の高原川の上流となっていた梓川が、割谷山から安房山へかけての火山群の噴出でせきとめられ、湖水をつくっていた時代の湖底にあたり、梓川が新しく南東に水路を開き、湖が干上った後に残った湖底盆地である。明治年間、すでに山小屋が設けられていたが、昭和のはじめ、島々から梓川沿いのバス道路が通じるまでは長い島々谷を溯り、徳本峠をこえて入る以外に道はなく、登山者の秘境といわれた地であった。

梓川とその北にそびえる奥穂高岳(中央)と前穂高岳(右)

上高地，河童橋

明神池付近にある嘉門治小屋

上高地の様相は大正から昭和のはじめにかけて大きく変った。大正四年の焼岳の噴火は梓川の流れを泥流で堰きとめ、上高地の南端に大正池を現出した。大正十五年にはこの大正池を貯水源とする電源開発の工事が進み、これに関連して進められた自動車道路の建設は昭和四年に中ノ湯まで開通、昭和八年に釜トンネルの難工事も終って、上高地へのバスの乗入れがはじまると、上高地の様相は急速に変化した。梓川の畔りには旅館が立ち、小梨の花(ズミ)の咲いていた小梨平はキャンプ場となり、大正池にはボートが浮かんだ。毎年夏の初め、日本アルプスを海外に紹介した功労者、ウォルター・ウェストンを記念してここで行われるウェストン祭は、いわば北アルプス全体の山開きともいえよう。夏のシーズン中、河童橋の周辺は上高地銀座の名がつくほどに登山、キャンプの人々が集まる。

焼岳

大正池

…からみた上高地、右端に大正池が…

西穂高岳方面からみた[illegible]小屋と焼岳

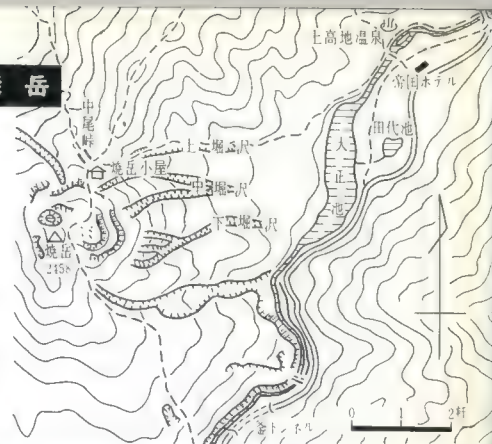
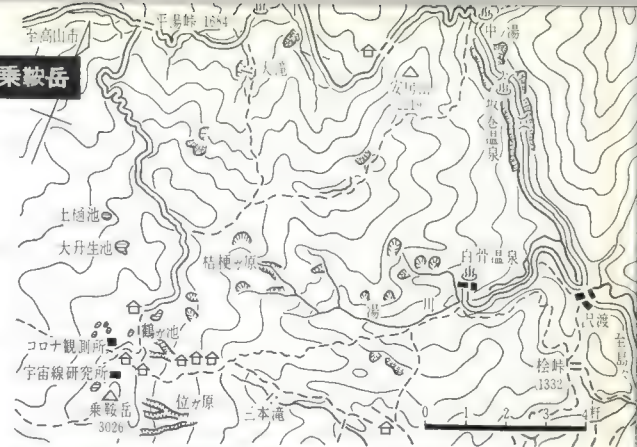
焼岳

北アルプス中唯一の活火山である焼岳は、大正四年の爆発で大正池をつくったが、いまも三つの小噴火口からいく筋もの白煙を上げて、上高地の景色に特別な色あいを与えている。登路は殆ど危険なところもなく、半日程度で上高地から往復でき、頂上からは北方に雄大な笠ガ岳が眺められる。頂上から西穂高への稜線を下ったところが焼ノ小屋のある中尾峠で、信濃から徳本峠を越え、さらにこの中尾峠を越えて中尾川、蒲田川沿いに飛騨の栃尾へ下る道は古くからの交通路であった。

焼岳の[illegible]

焼岳[illegible]火山の爆発による枯木[illegible]

霞沢岳から焼岳(手前)と乗鞍岳をみる

乗鞍岳

乗鞍岳は焼岳、乗鞍岳、御岳と続く火山脈中の一峰だが、北アルプスの山系とは焼岳の南、安房峠によって、御岳とは野麦峠によって切りはなされた独立峰である。信濃、飛驒にまたがって東西に厖大な尾根を張る、いまは活動を停止したコニーデ型の休火山だ。山上の地形はかなり複雑で主峰、剣ガ峰をはじめとして十有余の峰を南北に連ね、その間には鶴ガ池をはじめ、幾つかの火口湖をたたえ、稜線の一部には旧火口壁の名残りもみられる。頂上からの展望は独立峰のためさえぎるものもないが、とくに南方、益田川を挟んでそびえる御岳の姿が美しい。頂上付近の平坦地には広いお花畑もあるが、この山の特徴はハイマツの多いことであろう。稜線から東方、位ガ原方面を見下すと一面ハイマツの海である。また東南麓にはかつて乗鞍の御料林として知られた深い樹林地帯が続いている。

平湯から乗鞍岳へ続くバス道路、背後に槍・穂高連峰がみえる

乗鞍岳には現在、気象観測所、宇宙線研究所、コロナ観測所、高山医学研究所などがおかれているが、これは乗鞍岳が独立峰で観測に適していることと日本の高山の中では最も交通の便がよいためであろう。昭和二十五年の夏には戦時中、陸軍が建設した自動車道路を整備して高山市から平湯峠を経て、海抜二千七百四十米の鶴ガ池までバスが運行され、いまでは松本市からも中ノ湯、安房峠、平湯峠経由でバスが乗入れている。高山市からはバスで三時間、七月中旬から九月下旬まではケーブル・カーのある立山とともに最も手軽に登れる山として、日帰りで高山気分を味わいに来る人々が増加している。

コロナ観測所

山頂付近のハイマツ帯

9時前にバスで到着，2時間ほどで下山する登山者が多い

バスが通じているので登山者の大半は軽装

バスの駐車場　夏は松本，高山両市から定期バスがある

現在、日本の登山の中心となっている北アルプスも、明治のはじめ頃は殆どの峰々が未踏であった。山々の間を縫い、高い峠を越えて信州と越中・飛驒とを結ぶ幾筋かの急峻な山道が通じているのみであった。古くから宗教登山の対象となっていた立山だけに越中側から登山路が開かれ、参籠のための室堂が建てられていた。登ればたたりがあると怖れられている峰もあった。明治の中頃になると日本にも近代登山が紹介され、先駆者的な登山家たちが信濃側から徳本峠を越えて上高地に入り、槍ヶ岳、穂高連峰をはじめ、周囲の山々へ登るようになった。上高地の主といわれた山案内人、上条嘉門治が活躍したのもこの頃である。上高地を中心とする山岳美が世に紹介され、登山の中心は北部の立山から南方の上高地周辺に、越中側から信濃側へとしだいに移って行った。これは北アルプスの地形が概して東側に急で、西にゆるく、西側から登ると山麓から稜線までの距離が非常に長いこと、また信濃側が東京からの登山者の交通に便利なことが大きな要因であった。だが、当時は登山者のための山小屋の設備もなく、登山は体力と経験と、そして時間に余裕のある人たちだけに許されたスポーツであった。大正に入ってから北アルプスの開発が本格的にはじまった。大正七年、登山者のための最初の山小屋、槍沢小屋が開業、大正年間に北アルプスの要所にはほぼ山小屋が開設され終った。登山路の開発も主として信濃側の後立山連峰、常念連峰、上高地周辺が進展した。昭和八年、徳本峠越えの嶮しい峠道にかわって上高地へのバス道路が開通すると、北アルプス登山の中心は全く南に移った。戦後の特徴は越中・飛驒側からの著しい開発である。昭和二十五年には乗鞍岳へのバス道路が開通した。長い登山の歴史を持ちながら、山麓からの道の長さが障碍となっていた立山にはケーブル・カーが架設され、さらにそれに続いて登山バスが運行されている。歩かないで山に登ることを批難する人たち、山の静けさが失われることを嘆く人たちも多いが、北アルプスの山々は、いま誰れでもが容易に登れる山へと変りつつある。

美ヶ原から北アルプス連峰をみる

岩波写真文庫目録

新刊

268 日本の社寺建築

269 宮崎県

270

*印は品切でございます

山小屋の朝

立山，ミドリガ池

¥ 100